

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

派遣生の基本情報

氏名：橋爪恵子

所属先：美学芸術学研究室教務補佐

派遣形態：個人派遣 P D

研究課題名：ガストン・バシュラールの身体論
(La théorie du corps chez Gaston Bachelard)

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名：フランス

都市名：ディジョン

研究機関名：ブルゴーニュ大学

コンタクトした主な研究者名：Maryvonne Perrot

(2) 派遣期間

出発日：7月20日

帰国日：9月24日

総日数：67日間

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要：

本研究はバシュラールの詩学で論じられる「身体」、とりわけ触覚や嗅覚などの「低級感覚」を備えた身体の問題を考察することを目的とする。バシュラールの詩学における「低級感覚」を備えた身体は、独創的でありながら他者へと伝達可能な詩的イメージを生み出しており、認識論をも含めたバシュラールの思想の根本的着想を読み取ることができる。しかし同時に「身体」に関する議論は、詩学に固有の視点をも提示する。したがって「低級感覚」をそなえた「身体」の議論を検討することは、バシュラールの根本的着想をふまえたうえで、詩学に固有の視点をさぐることにつながることが予想される。

(2) 実際に達成された成果：

ブルゴーニュ大学図書館では、予定していた書籍を閲覧・複写することができた。とりわけバシュラールの思想形成に欠かせない役割を果たす歴史学者ガストン・ルプネルに関する書籍は、ルプネルが以前ブルゴーニュ大学の教授であったこともあり、学内報を含めて日本で入手不可能であった資料にあたることが可能となった。

また同大学名誉教授の **Maryvonne Perrot** 氏にお会いし、渡航者のこれまでの研究テーマ、および「バシュラールの身体論」を中心としたこれからの展望についてディスカッションすることができた。氏からは、渡航者の主要論点に対して大筋の賛意を得るとともに、身体を論じるにあたって重要となるバシュラールとスピノザとの類似点をご指摘いただいた。スピノザの汎神論的世界観のなかで身体は、精神と対立するものではなく神＝自然の2つの側面としてとらえられている。バシュラールはスピノザに対して直接言及することはなかったが、常に自然とのかかわりの中でイメージという精神が生み出すものの源泉とされるバシュラールの身体を理解するに際して、スピノザへの着眼は手がかりになると考えられる。さらにブルゴーニュ大学では、雑誌 **Cahiers Gaston Bachelard** の最新号などの研究資料をいただいた。

(3) 今後の研究展望：

今後は未読の複写資料に目を通すとともに、今回の渡欧で得た仮説の検証を行うことを予定している。具体的には、バシュラール思想におけるルプネルの影響、およびスピノザとの類似点の検証である。ルプネルは当時の歴史学者と異なり、目的論的歴史観を否定している箇所が見られる。この点をより検討することで、バシュラールの時間論との関連を見つけることができるのではないかと推測される。またスピノザとの関連では弁証法概念が重要となることが予想される。バシュラールは身体と自然の関係を、時間論で論じた弁証法的関係としてとらえており、スピノザとバシュラールの類似点を指摘するさいにはこの点に関して慎重に考察することが必要となると考えられる。